

# リニューアルに伴う展示構成

## II. 人文展示室

庄内昭男\* 高橋 正\*\* 糸田和樹\*\*\*

### 1. 人文展示室の基本的な考え方と特徴

人文展示室はかつて第一展示室「秋田のおいたち」という名称で常設展示が行われていた1037㎡のスペースで展開された。この展示室では旧石器時代から近現代までの、秋田の歴史と人々の生活を紹介する、という基本的な考え方に立って展示内容についての検討が行われた。以前の第一展示室は地質・考古・歴史の3部門が中心となって、民俗・工芸・生物の各部門が加わるという総合展示の形態をとっていたが、今回のリニューアルでは自然展示室が別フロアに作られることもあり、考古・歴史の2部門が中心となって展示が構成され、その中に民俗・工芸部門の資料が、近世・近現代の生活の様子的一端を伝えるものとして紹介されるスタイルをとった。

展示室の特徴としては次の三点があげられる。第一にはオープンでフレキシブルなスペースであること。第二にはジオラマや模型・人形による展示を極力抑え、実資料を中心に展示したこと。第三には、縄文時代と近世に原寸大の復元資料をおき、生活空間を直観的に体感できるようにしたことである。以下この3点の特徴について具体的に述べたい。

一点目のオープンなスペースについては、中央に大通りを展示室の反対側まで通すことにより、それぞれの興味関心に応じて見学できるようになった。また、強制動線でランチ方式であった以前の展示室では、展示室の全体像がわかりにくく、あとどのくらいで出口に到るのかわからないといった来館者の声があったがこれに答える形となった。しかしながら、フリーの動線に対して近現代の側から展示を見る来館者やどちら方向から見てよいかとまどう来館者等も若干見られるため、より細やかな対応が求められる。またフレキシブルなスペースについては、展示替えを容易にしたことがあげられる。これにより期間を限定した資料

の公開や、新発見資料のタイムリーな公開等に対応できるような展示ケースの配置とした。また解説系においても、各解説パネルは取り外し可能なものとし、更新等の必要があった場合は対応可能な仕様とした。さらに、解説プレートと呼んでいるA4サイズを3枚あわせた解説については、館内で作成できるものとし、内容のスピーディな更新を可能にした。

二点目の実資料を増やすことについては、以前の展示では約650点であった資料数を約3000点に増やし、資料によって得られる情報を来館者に伝えることを主眼とした。

三点目の原寸大の復元資料については、縄文時代のコーナーに竪穴住居の模型を置き、近世のコーナーには江戸時代の商家の店先を原寸大の模型で表し紹介した。前者は竪穴住居の中に来館者が入って中の雰囲気を感じることができるとともに、15分ごとに流れる効果音と光の演出を行っている。後者はコミセと呼ばれる空間の中で店先を眺めるとともに、通り土間を通して商家の構造を一部見学できるようになっている。

以上3点が、人文展示室の大きな特徴であるが、各時代ごとの展示内容及び表現方法については項を改めてまとめたい。

### 2. 展示方法及び表現内容

#### (1) 人文展示室における考古部門の展示表現について

従来の人文展示室は、ジオラマ手法を中心とした展示構成であったが、そうしたジオラマ手法では、まだ研究過程が残されているのかかわらず観覧者の目には研究が完結した印象が刻まれてしまう傾向があったと思われる。今回の通史の中での考古部門の構成については、発掘調査の成果を中心に調査研究による考証が深化したこと、実資料の数が充足し展示表現を広げられる予感があったこ

\* \*\* \*\*\*秋田県立博物館

と、しかも保存処理技術の進歩によって展示できる資料の種類が多くなったことから、「くらし」をテーマに実資料と対話できる展示とした。そこでは発掘調査の経過なども事実関係を認識してもらう手段と考え、映像の中に組み込んだ。

そして秋田の歴史の流れの中で、より時代の変化と地域性を表現できるような項目を設定することを意識した。たとえば旧石器時代では遺跡のひろがりや米ヶ森型台形石器の紹介、縄文時代では自然との共生、共同生活、弥生時代～古墳時代では北から人の移動、古代では城柵と住民との関わりなどであった。

## (2) 人文展示室における歴史部門の展示表現について

人文展示室の基本的な考え方は「秋田の歴史と人びとのくらしを紹介する」ことである。概念的なことではあるが、歴史の中で「人びとのくらし」を展示するという何をどのように考えたのかを述べる。一般的には「人びとのくらし」といった場合衣食住、生業から信仰などの精神的な文化を含めた基層文化全般を指すが、人文展示室は通史の形態をとって、時間軸に沿って各時代ごとのテーマをもうけている以上、全時代についてその総体を紹介することは物理的に無理がある。したがって、各時代の概要を解説プレート等である程度は補っているものの、特徴的な部分をテーマに従って紹介するという方法をとらざるおえない。

そこでテーマを設定する際には、次の2点のことを意識した。

第1は「人びとのくらし」を展示する際に、くらしの背景にはそれを支える種々の経済活動があり、しかもその経済活動は時の政治情勢によって左右されるということである。つまり「くらしの展示」＝「政治経済史を除いた展示」にはなり得ないのであって、当然ことながら時代の中でどのような政治・経済の情勢があり、それが人びとのくらしにいかなる影響を与えたのかという構造的なとらえ方の中に「人びとのくらし」を置く必要がある。すなわち「人びとのくらし」はその歴史性の中で相対的に捉えるべきであるという視点を一貫している。

第2には人びとのくらしが安定したものとなるためには、必ず種々の戦い・闘争があるという側面を無視できないということである。もちろん支配者が自己の権利を獲得するために起こす戦いも重要なことではあるが、展示ではむしろ為政者レベルでの戦いに際して庶民はどのようにそれと向き合ったのか、という面を重視した。またそれとともに、人びとが民衆レベルでの自己実現のためいかなる動きをしたのかという点に着目した。

以上述べたことについては、こうした考え方が濃密に出ている部分と、そうでない部分との温度差があることはいなめないが、人文展示室における歴史部門の展示はこの考え方をベースとして内容の検討を行ってきた。

展示の手法については、実資料を多く展示し、資料を見てもらうことによって人びとのくらしを考えることを基本とした。したがって映像や模型による説明的な展示方法はとらず、映像についても、その映像自体に資料性を持たせるような使い方をした。

## 3. 各テーマごとの表現内容と資料構成

### (1) 旧石器時代

#### ① 石器製作技術の広がり (旧石器項目A)

##### <表現内容>

「秋田にいつごろ、人が住み始めたか」の問いに応えられる資料として、汎日本的な分布を示すとともに年代も3万年前と推定される河辺町七曲台遺跡群出土の台形様石器を紹介した。また旧石器時代における地域性をあらかず資料として、2万5千年前に年代が推定され、秋田を中心とした分布が確認されている米ヶ森型台形石器を紹介した(秋教委 1985a 1985b、協教委 1977、佐藤 1987、日本第四紀学会 1992)。

##### <資料構成>

河辺町七曲台遺跡群から発見された台形様石器をガラスケースにおさめた展示コーナーを設けた。初めて米ヶ森型台形石器の製作技法が確認された協和町米ヶ森遺跡や多数の台形石器が発掘された琴丘町家の下遺跡など、秋田県内で発見された米ヶ森型台形石器の石核と台形石器を合わせて展示した。



### <展示補助資料>

{グラフィックパネル（以下「G」と表記）：台形様石器の分布} 日本列島における台形様石器の分布を図化した。

{G：米ヶ森型台形石器の分布} 秋田を中心とした米ヶ森型台形石器の分布を図化した。

{模型：モデル製作} 溝を切った植刃モデル2点を製作し、選別した台形石器を埋め込んだ状態で展示した。

{解説プレート（以下「P」と表記）} a. 秋田県の旧石器時代遺跡 b. 旧石器時代遺跡と石材産地 c. 米ヶ森型台形石器の出土状況 d. 米ヶ森型台形石器の製作工程 e. 米ヶ森型台形石器の切れあじを試す

### ②石器をたずさえて狩りへ（旧石器項目B）

#### <表現内容>

：遺跡の背景：南外村小出Ⅳ遺跡では、300点前後の旧石器およびその剥片が発見され、製作の場・消費の場・廃棄の場が想定できるような石器と剥片の分布が検証された。その小出Ⅳ遺跡を背景とした旧石器人の活動の様子を映像化した。また小出Ⅳ遺跡から出土した石器から剥片まですべての資料を展示した（秋埋文 1991a、仙台市富沢遺跡保存館 1998）。

{ミラービジョン} いずれも実写撮影である（ア）待機映像「石器製作」（イ）「小出Ⅳ遺跡について」の場面に、ハーフミラーに写る実資料を組み合わせた。

（イ）「小出Ⅳ遺跡について」

#### ○シナリオ

：登場人物：

石器を製作する男（家族の父親）

石器製作を手伝う（母親）

石器製作を手伝う（小さい子・妹）

石器の柄を整える（大きな子・兄）

父親は石器の製作を行っている。製作する石器は、槍状のものである。

母親と小さな子は、製作途中で出た剥片のあとかたづけを手伝う。

大きな子は、木で作った槍の柄の部分を整えている。やがて石器製作が終わり、父親は大きな子にでき

あがった石器を手わたす。

小さな子が、父と兄に知らせる、遠くに動物の移動する姿がみえることを。

母親は荷物をまとめ、家族全員が移動する準備をはじめ。

速やかに準備が完了。移動をはじめ。

= 景観描写 = 背景については、地質図・現況写真などを参考にCG画を作成したが、秋田大学教授白石建雄氏から助言を得、手直しを行っていった。

{ミラービジョンの資料}

突き刺す道具と考えた大型のナイフ形石器を示し、小出Ⅳ遺跡の出土ナイフ形石器から、槍の長さを15cmと推定する。

= 石器製作 = 待機映像の石器製作場面の撮影については、群馬県岩宿文化資料館学芸員小菅将夫氏の協力を得た。

#### <資料構成>

ミラービジョンの左側にガラスケースを配置、石器と剥片を大きく分けて展示した。

### ③石器の使われ方（旧石器項目C）

#### <表現内容>

旧石器時代の石器をきる・けずる・なめす・といった用途別に展示。各石器をもたせた手首の模型で用途の説明を補完した。

#### <資料構成>

4つのガラスケース毎に秋田県内出土の旧石器を、ナイフ形石器・搔器・彫器・石斧に分類して展示した。

#### <展示補助資料>

{模型：石器の使い方} ナイフ形石器・搔器・彫器・石斧の各石器を、旧石器人の手を表現した模型に持たせ、木材・皮・骨にそれぞれ加工痕跡をいれた。

### ④石槍（旧石器時代可変展示コーナー）

#### <表現内容>

旧石器時代から縄文時代にかけて狩猟に使用された槍状の石器がある。片面加工のナイフ形石器から両面加工の尖頭器をへて、石槍にいたる変化を実資料を通じて紹介した。

## (2) 縄文時代

### ① 竪穴住居（縄文項目A-a）

#### <表現内容>

松木台Ⅲ遺跡の大木9式のムラを構成した住居跡から柱配置と炉の位置が明確なSI38住居跡を選定して復元した。家の直径は5mで、屋根の高さは4mほどである。

発掘調査の際に作成された図面と写真をもとに住居の復元を行った。作成された平面図からは、以下の内容が読み取れる。掘られた竪穴を上から見た形は方形に近く、角が丸くなっている。竪穴の内部には、隅丸方形の形に沿って小さい穴があり、その内側には間隔を開けた深い穴がある。また南側の壁に寄った位置には炉が作られている。

さらに立体物として復元するために、以下の項目について推定作業を行った。まず作成された土層図から掘られた竪穴の深さを推定した。表土の下にある黒土を平らにして、竪穴が掘られていたと考えられるため、深さは70cm前後とした。次に外側にめぐる小さな穴は、壁が崩れるのを防ぐ杭を埋めた穴と推定し、高さ80cmとした。内側の深い穴は六個あり、梁と桁を長方形に組める位置関係から六本柱で屋根を支えたと推定した。なお柱の太さは、穴の大きさから20cm前後とし、梁と桁の高さは、縄文人の身長を考慮して165cmとした。

これらの推定条件から屋根の高さや形も決めて行く必要があり、SI38竪穴住居の20分の1の実測図をもとに模型を製作して検討した。模型に使用した材料は、スタイロホーム、丸棒と竹ひごである。スタイロホームを熱線できり抜いて貼り合わせ、掘り込んだ竪穴にした。丸棒や竹ひごは屋根や壁を支える柱や垂木の代わりにした。柱や垂木を結ぶつるの代わりにはニクロム線を使った。

屋根の形は、最初は円錐を基本と考えて、梁や桁に寄せ木をして円に組んで模型を製作した。円錐形に組んだ際の屋根の高さは、展示室の天井より50cm高い4m50cm。土手の幅が90cmとなり、直径も5mを超えていた。

その製作した模型を基に、東北芸術工科大学教授宮本長二郎氏の指導を受け、その際に屋根と壁の構造に訂正が加えられた。周囲を巡る小さい穴

は、壁になる垂木を据えた穴で、屋根は桁と梁にのる形となった。南壁側は壁が地面から垂直に立ち上がり、炉の前にある穴は張り出した切り妻の屋根の支えとした。こうして屋根の高さは、4m前後に、土手の幅も70cm戦後に縮んだ形になった。

基礎工事の関係で床を下げられないことから、展示室の床面と住居の床面を同じ高さにするしかなく、竪穴状にするためには土手を盛り上げて高くすることとした。

以上の過程を経て、竪穴住居を復元する設計が完了した。

今回の展示では、当時の生活を体感してもらうことに主眼をおいた。そのため住居の内部に入っていけるような構造を考えて住居の西側の壁は取り除き、屋根も萱をかけないで柱組を露出させた。またくらしの空間として臨場感を出すため、音と光による演出を組み込んだ。音は季節によって変わるようにして、竪穴内部の展示物も四季毎に変化させていくこととした（秋埋文 2001、浅川 1998、福島県文化財センター白河館 2001、十日町博物館 1995、仙台市富沢遺跡保存館 2001）

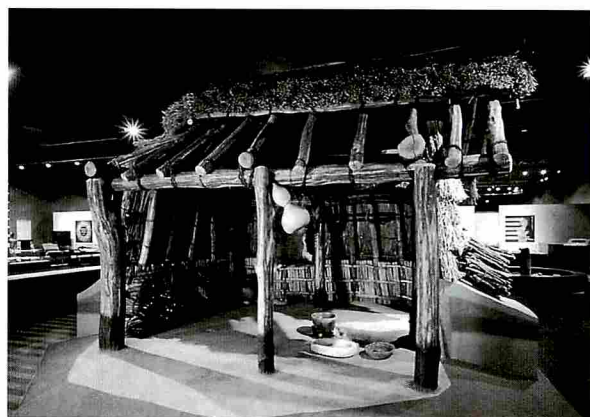


図1 竪穴住居（北→南、展示室入口側からみて）

#### <展示補助資料>

{音響・映像} 住居の上にスピーカーと照明を配置した。15分サイクルで音が流れ、照明が照らされるシステムである。音響は、竪穴での暮らしの様子と遺跡が立地する台地の環境を考え、四季毎に内容を変えている。照明は、夕日があたり縄文人の陰が竪穴に映るもので、その後夜になって行くという構成である。



## ②採集・漁労・狩猟（縄文項目A－b）

## ＜表現内容＞

縄文時代には石器を中心として用途に応じてさまざまな道具が作られていった。縄文時代全般の展示を通じて映像・模型との調整をはかった上で、ここでの表現を共同作業にしばり、狩猟・漁労・採集における作業場面を想定した。40cm角の小さな模型製作し、そのまわりに実際に使用したであろう実物資料を展示した。

## ＜展示補助資料＞

〔模型〕 採集の模型製作にあたり、国立科学博物館「日本人はどこからきたか」でイラストを場面設定の参考とした。漁労の模型製作にあたり、「山漁村生活史事典」を場面設定の参考とした。狩猟の模型製作にあたり、「新潟県立歴史博物館総合図録」を場面設定の参考とした（秋山 1991、国立科学博物館 1988 2001、新潟県立歴史博物館 2000）。

## ③縄文時代の環境（縄文項目B）

## ＜表現内容＞

：遺跡と背景：大館市池内遺跡では縄文時代前期の集落遺跡が調査され、台地から竪穴住居跡・貯蔵穴跡・墓跡などが検出された。台地の下が低湿地となっており、当時の人が不要になった遺物を廃棄した場所となっていた。低湿地の調査では、土器や石器とともに多種類の植物遺存体が発見された。植物遺存体の分析からは縄文人が自然林を切り開き、二次林とその周辺から採集した植物を利用していたことが知られた。その植生の情報を通じて、縄文時代前期のムラを取りまく環境について表現することとした（秋埋文 1999、佐原 1994）。

## ＜資料構成＞

保存処理した木材のうち加工痕跡のあるものを選定し、樹種と加工方法の説明を加える。

## ＜展示補助資料＞

〔G：林の景観〕 縄文時代の導入として、自然との共生を含みとして大型写真パネルを配置。

〔模型：鉢の復元〕 池内遺跡出土木製鉢の復元、木目と木取りによる形の決定を行う。

〔自主製作模型：木の加工〕 石器による木の加工

痕跡の凡例を紹介、横斧・縦斧のモデル製作する。  
〔P〕 a.日本の森林分布 b.池内遺跡から出土した木材 c.谷底の捨て場で採集された種実

## ④縄文時代の食べ物（縄文項目C）

## ＜表現内容＞

自然の恵みを効率的に手に入れ食物としていたことを、食物採集のサイクルとしてグラフィック化した。また季節毎に得られる中心的な食材で四季のレシピを考え、調理したもののサンプルを合わせて展示した。秋田県内の発掘調査で確認された遺構から保存・調理の情報を付加した（畠山 1989、福島県立博物館 1997、山崎 1998）。

## ＜展示補助資料＞

〔G：採集サイクル〕 秋田県の貝塚から得られた自然遺物のデータや現在の秋田のくらしの中から自然に得られる食材も提示した。

〔模型：四季毎の食品サンプル・G：四季毎のレシピ〕 食事メニューのイメージ化。実際に調理実験を行い、石器で加工した食材や土器で煮炊きした状況を写真撮影し、調理後の状態のものをサンプル化した。

〔G：保存と調理に係る遺構〕 貯蔵穴・水さらし場遺構・炉の情景

## ⑤台地のくらし（縄文項目D－a）

## ＜表現内容＞

縄文時代中期の集落は、全国的に広場を中心としてそのまわりに住居が配置された環状集落としての構造が確認されている。秋田県内では近年、高速道路の建設で調査された岩見川沿いの河辺町松木台Ⅲ遺跡で、中期中葉から後半までの集落遺跡が調査されており、広場を中心として周辺に竪穴住居が配置された状態で発見され、さらに広場の中心には墓地がともなうことも確認された。ここでは墓地が作られた中期中後半のムラの構造を示し、そこに展開された人びとのくらしを映像と模型で表現した。墓地の作られた大木9式土器に対応する住居群の存在と住居跡の配置状況の確認については、『松木台Ⅲ遺跡発掘調査報告書』を参考に出土資料の分析を行った上で、4軒とした（秋埋文 2001、国立科学博物館 2001）。

<資料構成>

1軒の住居で使用した道具がどうであったか。SI82・38・52・96各住居跡から出土した石器・土器を住居毎に展示した。

<展示補助資料>

{模型:松木台Ⅲ遺跡A区発掘状況} ①松木台Ⅲ遺跡の発掘調査状況模型、遺構配置を50分の1で製作。上にレーザーポイントを組み込み映像②のストーリー展開に合わせ、4軒の竪穴と墓地の位置を指示する仕組みとした。

{映像表現} 待機映像の(ア)と、ストーリー展開の(イ)で表現。

(ア) {待機映像} 住居跡・墓地跡・貯蔵穴跡のそれぞれについて発見状況と掘り上げた状況の2段階構成で表現した。

(イ) 台地のくらし

{映像・模型} ムラの構造について、広場・住居4軒・墓を映像の中で表現し、その周囲でのくらしの情報をつたえる。

○シナリオ

季節は秋。構成員を20名としてそれに生業をふりわけける。

- a. 竪穴住居の修理をする。
- b. 薪の準備をする。
- c. 貯蔵穴を掘る。
- d. 木の実を加工する。
- e. 墓でのいのり。

= 植生 = 松木台Ⅲ遺跡の背景描写にともない、辻誠一郎氏の指導を受ける。

{P:縄文時代のムラ} a. 秋田県の集落遺跡 b. 集落遺跡、能代市杉沢台遺跡、協和町上ノ山Ⅱ遺跡 c. 集落遺跡、千畑町内村遺跡、大館市萩峠遺跡

⑥ムラとムラのつながり (縄文項目D-b)

<表現内容>

県内で産出しない翡翠や琥珀などが縄文時代の遺跡から発見され、遺物を通じて交流があったことがうかがい知れる。近隣のムラ同士での結びつきがあって、広い範囲での交易が可能になっていたと考え、台地・川・海を介在した交流をイメージしてグラフィック化した。

<資料構成>

松木台Ⅲ遺跡出土の黒曜石が同定され、秋田県男鹿半島産・岩手県雫石産・青森県鱒ヶ沢産のものがあることがわかった。翡翠製大珠とともに能代市上ノ山遺跡から出土した北陸系土器と、八郎潟町沢田遺跡出土の北陸系土器を展示した。

⑦縄文人とまつり (縄文項目E)

7 a. 環状列石 (縄文項目E-a)

<表現内容>縄文時代の精神生活に関わる象徴として、特別史跡である鹿角市大湯環状列石の情景および航空写真と、野中堂日時計様組石(75年製作済み)のレプリカでゾーン設定して展示した。最近の調査成果から、環状列石と天文との関係を表現の主体とした(小林 1996)。

<資料構成>

縄文時代後期の二つの環状列石を比較、大湯環状列石と伊勢堂岱環状列石の出土資料を展示。共通するものとして鐸形土製品・土偶・動物形土製品・キノコ形土製品を展示、また大湯特有の土器として片口土器、伊勢堂岱遺跡特有の土器として紐でつり下げて使用したと思われる鉢形土器を展示した。

<展示補助資料>

{G:万座環状列石の遠景} 万座環状列石の手前から夏至の日没を遠くに捉えられるような位置で構図を設定し、撮影した。

{模型:日時計様組石レプリカ} 先に製作していたレプリカを床面に配置し、写真パネルとの関連をもたせた。

{P:環状列石} a. 組石の下を掘る b. 環状列石と太陽 c. 環状列石構造

7 b. 埋葬 (縄文項目E-b)

<表現内容>

柏子所貝塚では、秋田県で唯一縄文人の全身骨格が発見されており、能代市教育委員会に一体が保管されている。75年に1号墓人骨での埋葬状況を展示しており、それを利用して秋田に住んだ縄文時代の人物像をイメージ化することを考えた。骨格からの正確な復元とまでは至らなかったが、人骨の埋葬状況に人物像が重ね合うようにハーフミラーを使用した演出を行った(秋教委 1965)。

## &lt;展示補助資料&gt;

{G:埋葬状況} 人骨については65年に成人男性であることが報告されており、そのデータをもとに人物像のイメージを図化した。

{P} a. 柏子所貝塚と人骨の発掘 b. 墓地遺跡  
c. 縄文時代の主な墓地確認遺跡  
7 c. 装身具 (縄文項目E-c)

## &lt;表現内容&gt;

墓地に埋葬された人物に副装した形で出土することが多いのが装身具である。したがって埋葬との関連を意識して展示コーナーを設定した。資料自体に細かい細工が施され、彩りもさまざまであることから、ショーウィンドウのような展示ができないかデザイン等の工夫を配慮した(仙台市富沢遺跡保存館 2001a)。

## &lt;資料構成&gt;

髪飾り・耳飾り・首飾りなど種類別に、半透明なガラス板に配置した。

## &lt;展示補助資料&gt;

{G:装身具} 耳飾り・首飾りなど縄文時代を通じて製作された物を男女の人物に想定してあてはめた。また流行ともいえる時期毎に変化の様子を加えた。

{P} a. かざりを着けた土偶 b. 装着体験、鏡を配置 c. 耳かざりをつける  
7 d. いのりの道具 (縄文項目E-d)

## &lt;表現内容&gt;

縄文時代を通じて、製作された信仰にともなう遺物を(ア)人物表現(イ)形(ウ)彩りの項目で分類した。

## &lt;資料構成&gt;

壁面とガラスケースで(ア)から(イ)までの分類展示を行う。(ア)では土偶・岩偶を配置、大型土偶を壁面に、小型の土偶はケース内に、(イ)では中期から後期の石棒を壁面に、(ウ)では飾り弓と彩色土器を壁面にその他漆塗り土器等をケースに展示した。

## &lt;展示補助資料&gt;

{P} a. 土偶と岩偶の移り変わり b. 石棒と石製品の移り変わり c. 縄文人と色のイメージ

## ⑧土器の移り変わり(縄文項目F)

縄文時代に使用された土器について、形や文様の施こし方が時間の経過とともに変化していく様子を、実資料の展示で表現しようとした。観覧者と土器との距離を近くに置くことで変化の伝わる情報が大きいものと判断し、配置を島展示にすることにこだわった。三角形に組んだ台を設置し、20cmの段差で高くなっていくように設計した。考古学上の時期区分に合わせて草創期～早期・前期・中期・後期・晩期の区分で土器を選別し、段差毎に配置した。さらに時期毎に変化が捉えられやすいように前半から後半の土器を配置した。

## &lt;資料構成&gt;

草創期の土器群は山内村岩瀬遺跡、早期の土器群は大館市鳶ヶ長根遺跡、前期の土器群は大館市池内遺跡・中期は八竜町萱刈沢遺跡、鹿角市天戸森遺跡、後期の土器群は鷹巣町伊勢堂岱遺跡、天王町西長根遺跡、晩期の土器群は田代町矢石館遺跡、湯沢市鑑田遺跡である。

## &lt;展示補助資料&gt;

{P:縄文土器} a. 秋田県を中心とした縄文時代前期から晩期の土器分布 b. 秋田県の縄文土器の移り変わり

## ⑨アスファルトの利用(縄文時代可変展示コーナー)

## &lt;表現内容&gt;

縄文時代前期から石器と柄がらとの接着や、土器のひび割れの補修などのためにアスファルトが使用された。秋田県には昭和町槻木や二ツ井町で地があり、資料を通じてさまざまな使用状況を説明した。

⑩シンボル展示: 縄文時代の重要文化財二点と関連資料を人文展示室の中央通路に四面ガラスケースに配置した。(ア)大型磨製石斧、(イ)人面付環状注口土器と人面付土器、同時期のこぶ付き土器を展示。

## (3) 弥生・古墳時代

## ①米作りが伝わる(弥生・古墳項目A)

## &lt;表現内容&gt;

西日本から近畿地方への稲作の伝播と呼応するように分布しているのが、遠賀川式土器である。



東北地方では遠賀川式土器と共通する要素をもつ遠賀川系土器が日本海側で発見されており、海岸部にそって稲作が伝わったものと考えられる。遠賀川系土器を使用した土器棺が出土している秋田市地蔵田遺跡や八竜町館ノ上遺跡の調査成果を通じて、米作りを受け入れた当時の秋田とその後の稲作の展開を考えた（国立歴史民俗博物館 1999、日本第四紀学会 1992）。

<資料構成>

秋田市地蔵田遺跡の砂沢式土器、遠賀川系土器と八竜町館ノ上遺跡の遠賀川系土器を展示した。また米作りが伝わった後でも縄文時代以来の石器が使用されており、弥生時代前期のムラが確認された秋田市地蔵田遺跡および大館市諏訪台C遺跡の石器類を比較できるように展示した。

<展示補助資料>

{G：遠賀川式土器の分布} 日本列島における稲作の伝播、海岸部にそって稲作が伝わってきた。

{模型：地蔵田遺跡} 秋田市街地の南東にあたる御所野台地から発掘された弥生時代前期の集落遺跡である。柵が築かれた中に住居跡が配置されているのが特徴であり、Ⅲ時期の変遷が考えられる中で4軒の竪穴住居を配置し、柵との関係をとらえた。とくに柵そのものの構造について配慮し、柵木を半裁した木材にし、横木や斜めの支柱をおくなど工夫をした。80分の1で小さくなるが、台地下に水田があったことを想定して、稲を収穫してきた人物などを12人配置した。

{G：米作りと秋田} 秋田県における弥生時代遺跡の分布状況などから推定した、米作りと狩猟、採集の行われた状況を前期・中期・後期の段階毎に想定した。

{P：弥生時代} a. 秋田県の子な弥生時代遺跡 b. 秋田県の弥生土器の移り変わり c. 秋田県ではじめて弥生時代の住居跡が発見された（若美町横長根A遺跡）

②北からの文化 南からの文化（弥生・古墳項目B）

<表現内容>

弥生時代後期には気候の寒冷化にともない北海道の後北式土器の文化をもつ人びとの南下があり、能代市寒川Ⅱ遺跡では後北式土器を供えた墓

が発掘された。その後古墳時代には南の土師器の文化をとまなう人びとが北上してきており、横手市田久保下遺跡では、土師器を供えた墓が発掘された。二つの遺跡の墓地は、地面に穴を掘った土坑墓で縄文時代以来の風習が続いていたことが考えられており、西日本から東日本にかけて形成された古墳文化とは別の世界が展開されていたと考えられる。二つの墓地遺跡から説明する（秋埋文 1989、1992、日本第四紀学会 1992、国立歴史民俗博物館 1999）。

<資料構成>

寒川Ⅱ遺跡および田久保下遺跡の墓地に副葬されていたものを、墓地毎に小ケース内に配置した。

<展示補助資料>

{G：寒川Ⅱ・田久保下遺跡の墓地} 遺跡データとして墓の配置、構造、埋葬状況のイラストをまとめた。

{P：秋田の古墳時代} a. 秋田県の古墳時代遺跡 b. 後北C<sub>2</sub>式土器をくらべる c. 東北地方の後北C<sub>2</sub>-D式系土器の出土分布

③西目町宮崎遺跡（弥生・古墳可変展示コーナー）

<表現内容>

宮崎遺跡の住居跡からは、古墳時代の土師器と北海道系北大式土器がともに出土しており、南と北の交流を資料を通じて紹介した。

(4) 古代

①文字が語る（古代項目A）

<表現内容>

古代になって秋田についての歴史的記録が文字情報として伝えられており、『日本書紀』における秋田の初見記事などを紹介する。発掘調査で出土した文字資料としての木簡について、検索装置をおいた体験コーナーを設定した。

<資料構成>

秋田城跡や払田柵跡から出土した木簡9点を、釈文をそえて展示した。

<展示補助資料>

{G：文献記事} 秋田に関する三つの記録 = 『日本書紀』斉明天皇四年（阿倍比羅夫の北航と秋田の初見）、『続日本紀』神亀四年（渤海の使者に関



する記録)、『続日本紀』天平五年(出羽柵を秋田村に移設) = を紹介し、あわせて地図上で比羅夫の北航や渤海使について示した。

{模型：木簡検索} パネル上面には発掘で出土した木簡の実物展示を行った。木製の机に、実物大に製作した表書きのある木簡5点を埋め込み、木簡を持ち上げることで内容が照合できるように、木簡で隠れていた机のくりぬき部分にイラストと文字情報をそえた。

## ②律令と民(古代項目B)

<表現内容>

漆紙文書や木簡から推測される、城柵と住民との関係についてグラフィックを通じて表現した(秋田城跡調査事務所 1992)。

<資料構成>

ろくろを使用した須恵器や内黒土師器によって土器製作の変化を示し、あわせて県北地方から発掘された把手付き土器など北と南の違いを示す資料も展示した。また鉄の道具によって製作された木製の器や生活道具を紹介した。

{G：律令と民} 秋田城の木簡と漆紙文書に記載が見える穴太部という人物をモデルにして、住民と役所の関係を描いた。

{G：古代秋田に暮らす人びと} 文字の登場とともに人名が現れ、家族構成や出身地など興味深い部分を抜き出した。発掘資料である木簡や漆紙文書に見える人名、史書に見える姓をもらった蝦夷の名前を列記した。

<展示補助資料>

{P} a. 秋田県の主な古代集落遺跡 b. 穴太部が記載された木簡と漆紙文書 c. 木簡・漆紙文書に見える古代の人名

## ③城柵のはたらき(古代項目C)

<表現内容> 秋田城跡と払田柵跡の調査成果を通じて、城柵の軍事・行政を司る役所としての役割を紹介する(秋埋文 1985c、払田柵 1999、市教委 2002)。

<資料構成> 構造に関わるものとして秋田城では瓦、払田柵では角材を象徴的に展示。さらに実資料は軍事的な機能にかかわる鉄鏃・砥石など、行

政的な機能に関わる漆紙文書などを分けて展示。

<展示補助資料>

{G：大型パネル：城柵遺跡}

秋田城跡および払田柵跡の現況写真を背景に、元慶の乱など蝦夷と朝廷の戦いに関することや、役所としての城柵の役割などについて紹介した。

{映像：城柵のはたらき}

秋田城跡と払田柵跡における発掘状況の写真を中心に、古代秋田の城柵について紹介した。映像のメリットを生かし、位置や面積などはアニメーションを使って視覚的に表現した。二つの城柵を比較しながら、それぞれの特徴が理解できるように内容を工夫した。映像はエンドレスで約6分の構成とし、常時放映の形をとった。

{P} a. 東北の城柵配置図 b. 兵士の数 c. 移された柵戸

## ④生産遺跡(古代項目D)

<表現内容> 須恵器が生産された窯のはぎ取り標本を展示。物資の大量生産のため丘陵地にまで開発が進んでいったことを示唆する(秋教委 1991)。

<資料構成>

窯の灰原から採集した窯体と破片とともに展示。

<展示補助資料>

{P} a. 竹原窯跡の土層のはぎ取り b. 窯の構造復元図 c. 秋田県の主な古代窯跡(秋埋文 1991 b)

## ⑤古代の終焉(古代項目E)

<表現内容>

平安時代後期の前九年合戦、後三年合戦は古代の東北地方に大きな変革をもたらした戦いであった。戦いの経過と、その結果奥州藤原氏による平泉政権が誕生したことを紹介した(新野 1981、田口 1987)。

<資料構成>

前九年合戦から後三年合戦の経過と奥州藤原氏の成立についてはパネルで解説し、重要文化財の後三年合戦絵詞(複製)は雁行の乱れの部分を表示した。もう一方のケースには館蔵の文政年間の後三年合戦絵巻写本を展示した。

<展示補助資料>

{G：後三年合戦} 前九年合戦、後三年合戦から

奥州藤原氏の成立にいたる経過を地図と系図等で解説した。

{P：後三年合戦} 後三年合戦絵巻の概要を戎谷南山筆の写本（横手市金沢八幡宮所蔵）の写真で解説した。

#### ⑥古代のいのり（古代可変展示コーナー）

##### <表現内容>

五城目町中谷地遺跡では、河川であった場所から斎串など払いの儀式に使用された木製品が出土しており、まつりの道具として紹介した。そのほか古代の信仰にとまなうものとして鏡のレプリカも合わせて展示した。

⑦シンボル展示：中仙町水神社所蔵の国宝「線刻千手観音等鏡像」のレプリカを展示した。

#### (5) 中世

「宗教文化の広がり」「洲崎遺跡」「物資の流通と交易」「秋田家資料」「武士団の動向」の5つのテーマから構成した。中世は展示の構成上、中央通路をはさんでの構成となるため、精神文化を扱う部分の「宗教文化の広がり」を通路の右側に、それ以外のものを通路の左側に配置した。

#### ①宗教文化の広がり（中世項目A）

##### <表現内容>

古代から中世につながる信仰の部分を選んだ。武士が台頭する戦乱の社会にあって、浄土教の流行と新仏教の成立は、この時代の宗教を前代とは異なるものとした。またこうした文化が地方に伝播していくことによって、秋田県内にも様々な宗教遺物を確認することができる。それらを実物やレプリカで紹介することによって、この時代の精神文化の一端を伝えることを目的とした（秋教委 1989、東北歴史博物館 1999、奈良 1976）。

##### <資料構成>

このコーナーの中心は、仏像では県内で唯一の重要文化財である阿弥陀如来坐像の複製を配置し、その左側に3体の県指定の仏像、右側に石像物（板碑・五輪塔）と金工物（懸仏・経筒）を展示した。

##### <展示補助資料>

{P}：a. 経筒の銘文の説明 b. 懸仏の奉納された神社の位置関係と奉納の目的を説明 c. 秋田県内の板碑の分布について

{P}：a. 阿弥陀信仰の広がり b. 全良寺の阿弥陀如来坐像の由来と特徴についての解説

{P}：a. 白山女神像 b. 不動明王像 c. 愛染明王像の概説と特徴

#### ②洲崎遺跡（中世項目B）

##### <表現内容>

八郎潟東岸の洲崎遺跡から多数発掘された住居跡や、300基を超える井戸や多くの木製品・陶磁器などを紹介した。また出土遺物とともに、この地が八郎潟を利用した水上交通の拠点であったことや、多数の板碑が確認できることから、有力な在地領主層の存在した可能性が高い地域であることなどもあわせて紹介した（秋教委 2000、高橋 2002 a、2002 b）。

##### <資料構成>

発見された木製品や陶器などを壁面にも展示し、中世の生活の一端を伝えるために大量の出土品を展示した。導入部に丸木舟を転用した井戸枠を配置し、この遺跡が八郎潟東岸に位置する地理的環境についてもふれた。

##### <展示補助資料>

{P：洲崎遺跡}：a. 洲崎遺跡とその周辺の地図 b. 洲崎遺跡空撮写真 c. 出土資料の内容 d. 井戸枠の形態 e. 人魚供養札の内容について

#### ③物資の流通と交易（中世項目C）

##### <表現内容>

地域的な権力の形成にともなって、各地で物資が流通し交易が盛んに行われるようになったことや、中国や朝鮮との交易による物資の移動の状況、それが秋田に与えた影響などを紹介した。また近年注目されてきた北海道を中心とした北方社会との交流についても紹介した（秋教委 1989、菊池・福田 1989、十文字町 1996、須藤 2002）。

##### <資料構成>

グラフィックパネルで日本と中国・朝鮮半島との交易、そしてその物資が秋田へ日本海ルートを通



通して交易が行われたことを紹介するとともに、秋田が北方社会との交易をも行っていた点について紹介した。また交易の一端を物語る実資料として穀丁遺跡出土資料や十文字町植田上丁遺跡出土銭、石質から北陸地方で製作されたと考えられる狛犬をあわせて紹介した。

<展示補助資料>

{G: 中世の交易ルートと物資の流れ} 日本海海運や北方との交易品や、それらに係わった港について地図で解説した。

{P} : a. 秋田県内の古銭出土地の地図 b. 穀丁遺跡の地図と解説 c. 植田の出土銭の内容と時代

#### ④武士団の動向 (中世項目D)

<表現内容>

秋田の中世における武士団の動向を出土資料および文献史料から展示した。中世の武士団が城館を形成して支配した様子を紹介した(秋田県 1961、秋教委 981、大館市 1979、男鹿市教委 1994・1996・1999、塩谷 1982、千畑村 1986、田口 1987、仁賀保町教委 1999)。

<資料構成>

仁賀保町山根館遺跡についてパネルと出土遺物から、中世城館の構造と領主支配について紹介した。また美郷町の本堂城跡については、江戸時代の絵図と航空写真から、山城と平城構造とその支配について紹介した。また古文書については政治史の概要について一部解説プレートでふれながら、有名な人物の資料(信長・秀吉・家康)と秋田の武士がどのようなやりとりをしたのかが伺える史料を紹介した。

<展示補助資料>

{G: 山根館} 山根館と城下の関係を示す地図と、土塁・石塁などの発掘状況写真などから、山根館の構造について解説した。

{G: 本堂城} 本堂山城、本堂平城を含む部分の航空写真に本堂城廻絵図の範囲を図示した。また現況の本堂山城、本堂平城の写真などをあわせてレイアウトした。

{P} : a. 秋田県内の城郭分布図 b. 檜山城・脇本城など県内中世城館の現状写真 c. 仁賀保氏の系譜と山根館の構造

{P} : a. 文治5年合戦と大河兼任の乱 b. 天正17年の湊合戦 c. 戦国時代の勢力図

#### ⑤秋田家資料 (中世可変展示コーナー)

<表現内容>

安東氏の日本海交易、特に若狭小浜の羽賀寺との関係などを紹介した(若狭歴史民俗資料館 2000、新秋田風土記刊行会 1984)。

<資料構成>

従来の展示ではふれられていなかった安東氏・秋田氏についてパネルで紹介するとともに、羽賀寺との関係に代表させる日本海交易について紹介した。また、秋田氏のご遺族によって当館に寄贈された秋田氏ゆかりの資料を展示替えをしながら紹介している。

<展示補助資料>

{G: 安東氏と羽賀寺} 安東氏・秋田氏の系図と羽賀寺縁起の写真、安東愛季像、秋田(安倍)実季像の写真などをいれ、安東氏と羽賀寺の関係を紹介した。

#### (6) 近世

近世は幕藩体制に組み込まれた身分制の社会である。したがって展示の中心には、「武士の生活」「町人社会の成り立ち」「村のくらし」の3テーマを設定した。その他総論として「幕藩制の成立と秋田」、各論として「林業と鉱山」「江戸時代の旅」「舟運の発達」の3テーマを設定した。

#### ①幕藩制の成立と秋田 (近世項目A)

<表現内容>

徳川氏による統一政権が秋田の地にもたらした社会の変化について概観する。従来秋田に勢力を持っていた安東氏、小野寺氏、戸沢氏に代わって、佐竹氏をはじめとした新しい領主が入ってきた。このような江戸時代初期における秋田の支配領域について解説した(秋田県 1977、田口 1987、本荘市 1994、2003)。

<資料構成>

江戸時代の秋田を紹介する際に佐竹氏の歴史のみに偏らないように、由利諸藩および鹿角の領地支配についてもパネルと実資料で紹介した。佐竹

氏については入部時の領主佐竹義宣の肖像画（複製）をはじめ、書状や土地支配の実態を示す検地帳などを展示した。

<展示補助資料>

{G：佐竹氏の領地支配} 出羽秋田領六郡絵図の写真によって佐竹氏の領地支配の概要を示した。また、久保田城や支城の存在地羽州街道・脇街道、番所の位置などを示した。

{G：由利地方の領地支配} 元和9年と寛永17年の由利郡所領構成図を比較した。また、由利郡の所領主への配置と領地高の変遷について図示した。

{G：鹿角一郡図} 秋田領と南部領の境界周辺について多くの情報を含む鹿角一郡図を写真パネルで紹介した。

{P：由利地方の領主たち} 由利郡内の諸領主について概説的に説明した。

{P：鹿角藩境論争} 秋田藩と盛岡藩との藩境論争について概要を記述した。

## ②武士の生活（近世項目B）

<表現内容>

武士は本来戦いを専門とする集団であるが、幕藩体制が成立し安定した社会になると、行政事務を担当する能吏としての側面が重視された。そうした武士の姿の一端を佐竹氏の中級家臣であった小貫氏の資料を中心として紹介する。

<資料構成>

本来の戦闘に係わる資料として陣羽織、陣笠、鎧袴などを展示し、後半部には食籠、燗鍋、湯桶などの生活用具を展示した。

<展示補助資料>

{G：久保田城下絵図} 久保田城下絵図を原寸大で写真パネルとし、江戸時代の城下町久保田の状況を紹介した。

{P：武士の暮らし} 江戸時代の武士の生活や仕事の内容について、秋田藩の中級家臣であった小貫氏を例に紹介した。

## ③町人社会の成り立ち（近世項目C-a）

<表現内容>

城下に武士が居住するようになると、武士の生活用品を供給する人々も城下に移り住むようにな

り、城下町は一代消費地となる。その中で商品の流通や生産を担った町人の活動を伝える資料や、町掟や株仲間などについても紹介した（金森1998）。

<資料構成>

天秤、大小板、看板、鑑札など商業活動に関する資料を前半部に、後半部には町人の生活用具を展示する。また山王祭絵馬（復元）や秋田風俗問状答附図、秋田風俗絵巻（映像）等によって年の年中行事と人びとのくらしの様子について紹介。

<展示補助資料>

{G：外町間数絵図} 外町間数絵図の原寸大写真を展示した。

{P：外町の成り立ち} 秋田藩の外町の構造や当時の職種などを紹介した。

{P：諸職と株仲間} 秋田藩の商業統制や株仲間の構造について紹介した。

{映像}：秋田風俗絵巻と秋田街道絵巻をプラズマビジョンで全場面を閲覧出来るようにした。最新のデジタル技術を利用し、自分で自由に絵巻を閲覧する感覚で閲覧できるようにした。またデジタル化した画像なので拡大縮小が三段階にわたり可能となった。このことによって来館者は、張り紙などを拡大して見る事が出来たり、細かな情報（商店の看板や襖の文字など）が閲覧できるようになった。

{P：山王祭大絵馬} 秋田市八橋にある日吉八幡神社の大絵馬について解説するとともに、展示資料では確認できない裏面の墨書についても写真で紹介した（金森1998）。

## ④復元された商家の「見世」（近世項目C-b）



図2 復元された商家の「見世」（南→北）



### <表現内容>

江戸時代の商家を復元するにあたり、そのモデルとして秋田市大町の金子家住宅を選んだ。基本的には久保田の商家という設定である。金子家住宅をモデルに選んだ理由は、①久保田の商家であること②現存する県内の商家の建築の中では江戸時代的の要素をよく残しているということ③現在も住宅が保存されており、内部の構造を見学することが可能であったこと（この見学には関係各位の御理解と御協力をいただいた）、以上3点である。ただし同住宅は明治20年の俵屋火事で江戸期の住宅が全焼した後に建てられていて、基本的な構造は江戸期の商家と大きな代わりはないものの、細部に新しい意匠がこらされている。また秋田県内には江戸期に建てられた商家は現存していないため、金子家住宅をベースにして、江戸時代に特徴的な町屋の要素を拾い上げ、細部については県外の江戸期の商家を見学し補足することを基本方針とした。

表現したい内容は「コミセ」と呼ばれる商家店先における空間、大戸から「通り土間」を通して蔵前もしくは水屋（台所）へ至る空間である。

参考にした県外の住宅は弘前市の石場家住宅（重要文化財）と黒石市の高橋家住宅（重要文化財）である。また、住まいのミュージアム（大阪市）における商家復元例を参考にした。

江戸時代の商家の展示に際しては秋田工業高等学校の五十嵐邦彦先生より御指導と御協力をいただいた。

{P：復元された商家の「見世」} 復元した商家の特徴や、コミセの持つ意味などを紹介した。また復元にあたり参考とした黒石市の高橋家のコミセを写真で紹介したり、江戸時代の商家の町並みを『足栗毛』の写真から紹介した。

### ⑤村のくらし（近世項目D）

#### <表現内容>

江戸時代の全人口の8割をしめた農民を、領主はどのように支配したのか、それに対して農民はいかにたたかったのか、さらにはそうした状況の中でどのような文化を築いていったのかを紹介した。

### <資料構成>

前半部に領主支配を示す史料として、検地帳や検地図絵（複製）を展示した。後半部には肝煎関係の資料や農村の副業であった養蚕関係資料、飢饉に関する史料などを展示した。

#### <展示補助資料>

{G：農民の生活空間} 1年間の農村の生活サイクルをイラストを交えて紹介した。

{G：養蚕と女性労働} 養蚕絵馬に描かれた図絵をもとに養蚕の様子とその工程を紹介した。

{P：身分としての農民} 江戸時代の農民統制の様子や農民の生活の仕組みなどを紹介した。

{P：近世の飢饉} 江戸時代の飢饉の実体について図絵の写真を中心に紹介した。

{P：寛政改革と農民支配} 秋田藩における寛政改革について紹介した。

### ⑥林業と鉱山（近世項目E）

#### <表現内容>

秋田藩では早くから山林を保護し、鉱山の経営に積極的にのりだした。藩による林業政策や鉱山経営の実態を紹介するとともに、木山方の賀藤景林・景琴を通して江戸時代後期の林政改革についてもふれた。

#### <資料構成>

前半部に林業・後半部に鉱山の資料を配置した。ともに同時代の絵画資料である、「柚子造材之畫」（グラフィックパネル）と「阿仁銅山作業絵巻」によって、当時の作業の様子を紹介し、実際の道具について実資料を配置している。

#### <展示補助資料>

{G：山林労働と農民} 柚子造材之畫の図を紹介し、作業の様子を紹介した。

{G：院内銀山舗岡略絵図} 院内銀山舗岡略絵図の写真をほぼ原寸で紹介し、近世の鉱山における過酷な作業状況を紹介した。

{P：近世の林業}

{P：近世の鉱山}

### ⑦江戸時代の旅（近世項目F）

<表現内容> 庶民の旅の姿とその道具、また旅をする上でどのような手続きがあったのかなどを紹介

介する（雄物川町教委 1999）。

<資料構成>

庶民の旅の道具や道中記などが中心であるが、道中手形や領内の移動を禁じた留物高札など政策的な資料も合わせて紹介した。また展示している天明年間の道中記については旅行したルートを地図上に図示し、庶民にとっての大きなイベントであったことを紹介した。

<展示補助資料>

{G：江戸時代の旅} 天明八年の道中記から、佐藤長右衛門の旅したルートを復元し地図上に表記した。

⑧舟運の発達（近世項目G）

<表現内容>

能代や土崎の湊には年貢米を含む大量の米が積み出され、多くの物資の移出入があった。他領との交流を示す資料とともに船舶関係の資料を紹介した（加藤 1941）。

<資料構成>

秋田と他領との交流を示す紀年銘のある資料や、船箆筒・船幟、また土崎湊で付船を営んだ長浜屋の客船帳など初公開の資料を展示した。

<展示補助資料>

{P：舟運の発達} 秋田藩の主要な湊である土崎湊と能代湊の移出入品や、どこの港からの船が入りしていたのか等を紹介した。

⑨近世秋田の文化遺産（近世可変展示コーナー）

<表現内容>

近世の学問・思想・文芸・工芸・美術など様々な分野で生み出された秋田に係わる文化遺産を紹介する。このコーナーでは毎年1回以上の展示替えを予定している（秋田市 1998）。

<資料構成>

オープン時は朋誠堂喜三二の資料を紹介した。喜三二は幼時に秋田藩士平沢氏の養子となり、江戸時代を代表する戯作者であった。

(7) 近現代

幕藩体制が崩壊し近代国家が成立した明治から、昭和40年代前半頃までを対象とする。あらゆる

面で近代化の波が押し寄せた時代であり、変化の激しい時代でもある。このコーナーではフロアを近代建築のタイルをイメージしたものに代え、展示ステージもレンガをイメージしたデザインにするなどのアクセントをつけた。基本的な構成は、右側の壁面で各時代のテーマを通史で構成し、左側には各時代を象徴づける道具を配置するという構成をとった。

①戊辰戦争（近現代項目A）

<表現内容>

戊辰戦争については、近世のコーナーと近現代のコーナーの間に移行期の項目として紹介し、時代表現を「維新」と表記した。この戦争において当初秋田藩は旧幕府寄りの姿勢を見せていたが、一転して新政府側に立ったため、奥羽列藩同盟の周辺大藩の攻撃にさらされる事となった。この戦争に対して秋田の人々はどのように対峙したのかを紹介した。

<資料構成>

戊辰戦争の図絵や陣羽織、武器拝借願、銃などの戦争に関連する資料とともに、農民落書などの世相を反映する資料を紹介した。

<展示補助資料>

{G：戊辰戦争} 戊辰戦争の経過とその状況を地図と年表で紹介した。

{P：戊辰戦争}

②近代の幕開け（近現代項目B）

<表現内容>

約260年間続いた幕藩値制の崩壊は、政治的にも文化的にも秋田の地に大きな変化をもたらした。しかし一方では封建的な制度や慣習も多く残り、人々が生活の豊かさや自由を獲得するためには、まだ多くの戦いが必要であった。新しい時代の変化と、その変化に人々がどのように対応したのかを紹介した。

<資料構成>

「地租改正と授産」「秋田の自由民権運動」「明治の風景」の3テーマからなる。それぞれパネルと地租改正事務雑誌、立志社会員証などの関連文書、看板・アイロン・ランプなどの生活用具から



構成した。また資料収集時に偶然発見された明治9年の遐邇新聞（秋田魁新報の前身）もこのコーナーに展示した。

<展示補助資料>

{G：人力車と背景} 明治期の秋田師範学校の建物を背景に人力車を展示した。

{G：地租改正と授産} 地租改正図から秋田における地租改正の様子について紹介し、また士族授産の概要にふれた。

{G：秋田の自由民権運動} 秋田県南部で自由民権活動を行った柴田浅五郎と立志社について、また秋田県北部で自由民権運動を行った石井庄司と北羽連合会について紹介した。

{G：明治の風景} 明治時代の秋田の様子をガラス乾板に残る画像を組み合わせで紹介した。

{P：地租改正と授産}

{P：秋田の自由民権運動}

### ③大衆社会の成熟（近現代項目C）

<表現内容>

20世紀に入る頃から、政党政治の発展を背景として、根強く残る封建的な価値観からの解放を目指す動きが活発になる。秋田でも文学運動として「種蒔く人」、教育活動として「北方教育」の運動がおこり全国的な評価を受ける。こうした社会の矛盾を克服しようとする動きを紹介するとともに、この時代の生活用具を紹介した（秋教委1983）。

<資料構成>

「種蒔く人」「北方教育」という秋田から全国に発信した文学・教育活動について実資料とパネルで大きく取り上げた。また小作争議に関する資料などこの時期の農民の姿を伝える資料や、置時計、手回しミシンなどの大正から昭和初期にかけての生活道具なども展示した。またポスターや双六などの当時の世相を伝える資料を壁面配置した。

<展示補助資料>

{G：種蒔く人} 「種蒔く人」の歴史を年表にまとめ、さらに当時の文学の歴史や社会情勢とあわせて紹介した。

{G：北方教育} 北方教育の先駆けとなった成田忠久について説明し、「北方教育」の歴史を秋田

の情勢、全国の社会情勢と併せて紹介した。

{P：秋田県の小作争議} 秋田県の小作争議についてその地域、件数、原因などを紹介した。

### ④戦争と庶民社会（近現代項目D）

<表現内容>

日本は昭和12年に中国と全面戦争に突入し、それはやがてアメリカやヨーロッパ諸国を相手にする世界戦争に拡大していく。こうした状況下で国民はどのような生活を強いられたのかを、当時の生活用具を紹介しながら表現した。

<資料構成>

配給切符や千人針、出征手旗などの戦時下の資料が中心であるが、あくまで戦争によって人々の生活がどのような影響を受けたのかという点に展示の主眼を置いている。そのため当時の児童画や時局を表現した絵はがきやポスターもあわせて展示した。

### ⑤新しい時代へ（近現代項目E）

<表現内容>

昭和20年第二次世界大戦が終わった後、廃墟の中から国民が立ち上がり、高度経済成長を迎えるまでの時代を紹介した。

<資料構成>

雑誌、絵はがき、ポスターなど時代の雰囲気を感じさせる資料や、テレビ・ラジオ・ミシンなどの生活道具を展示した。

<展示補助資料>

{映像}：昭和30年代後半の型式のテレビに、昭和36年の秋田国体の映像と昭和41年の集団就職の映像をエンドレスで放映した。秋田国体や集団就職は高度経済成長期の秋田を象徴する出来事と考えた。

### 参考文献

- 秋田県 1961『秋田県史 中世資料編』
- 秋田県 1977『秋田県史 近世編上・下』
- 秋田県 1981『秋田県の中世城館』
- 秋田県 1983『秋田県教育史』
- 秋田県教育委員会 1965『柏子所貝塚発掘調査報告書』

- 秋田県埋蔵文化財センター 1985a 『家の下遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1985b 『七曲台遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1985c 『払田柵跡-政庁跡-』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1989a 『寒川Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1989b 『秋田県の文化財』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1991a 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ-小出Ⅳ遺跡-』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1991b 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅹ』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1992 『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1999 『池内遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県埋蔵文化財センター 2000 『洲崎遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県埋蔵文化財センター 2001 『松木台Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
- 秋田城跡調査事務所 1992 『秋田城出土文字資料集Ⅱ』秋田市教育委員会
- 秋田市教育委員会 2002 『秋田城跡-政庁跡-』
- 秋田市 1998 『秋田市史文芸・芸能編』
- 秋山高志他編著 1991 『図録・山漁村生活史事典』柏成社
- 浅川滋男編 1998 『先史日本の住居とその周辺』同成社
- 大館市 1979 『大館市史第1巻』
- 男鹿市教育委員会 1994、1996、1999 『脇本城と脇本城跡』
- 雄物川町教育委員会 1999 『雄物川町郷土史資料第27集-佐藤長右衛門天明八年道中記』
- 加藤助吉編 1941 『土崎港町史』秋田市役所土崎出張所
- 金森正也 1998 『近世秋田の町人社会』無明舎
- 菊池徹夫・福田豊彦 1989 『よみがえる中世4-北の中世津軽北海道』平凡社
- 協和町教育委員会 1977 『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』
- 小林達雄 1996 『縄文人の世界』朝日新聞社
- 国立科学博物館 1988 『日本人の起源展』読売新聞社
- 国立科学博物館 2001 『日本人はるかな旅展』NHK、NHKプロモーション
- 国立歴史民俗博物館編 1999 『新弥生紀行』朝日新聞社
- 佐藤宏之 1987 『台形様石器研究序論』『考古学雑誌73-3』日本考古学会
- 佐原真 1994 『斧の文化史』東京大学出版会
- 塩谷順耳編 1982 『中世の秋田』秋田魁新報社
- 十文字町 1996 『十文字町史』
- 新秋田風土記刊行会 1984 『新秋田風土記』創土社
- 須藤英之 2002 『発掘された貨幣』『中世出羽の領主と城館』高志書院
- 仙台市富沢遺跡保存館 1998 『企画展-氷河期を生きる-』
- 仙台市富沢遺跡保存館 2001a 『企画展-アクセサリ-』
- 仙台市富沢遺跡保存館 2001b 『特別企画展-編む・組む-』
- 千畑村 1986 『千畑村郷土誌』
- 高橋学 2002a 『井川町洲崎遺跡とは何か-洲崎遺跡に見る中世出羽北半の一様相-』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第16号』秋田県埋蔵文化財センター
- 高橋学 2002b 『発掘された中世の街道・古道』『中世出羽の領主と城館』高志書院
- 田口勝一郎編 1987 『図説秋田県の歴史』河出書房新社
- 東北歴史博物館 1999 『祈りのかたち』
- 十日町市博物館 1995 『十日町市博物館常設展示案内』
- 奈良修介編 1976 『秋田県の紀年遺物』小宮山出版
- 新潟県立歴史博物館 2000 『常設展示図録』
- 新野直吉 1981 『古代史上の秋田』秋田魁新報社
- 仁賀保町教育委員会 1999 『山根館跡』
- 日本第四紀学会 1992 『日本の人類遺跡』東京大学出版会
- 畠山剛 1989 『縄文人の末裔たち』彩流社
- 福島県文化財センター白河館 2001 『年報2001』
- 福島県立博物館 1997 『企画展-縄文たんけん-』
- 払田柵跡調査事務所 1999 『払田柵跡-区画施設-』秋田県教育委員会
- 本荘市 1994 『本荘市史 通史編Ⅱ』
- 本荘市 2003 『本荘の歴史』
- 山崎京美 1998 『遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究-秋田県の貝塚遺跡-』1997年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告
- 若狭歴史民俗資料館 2000 『羽賀寺』



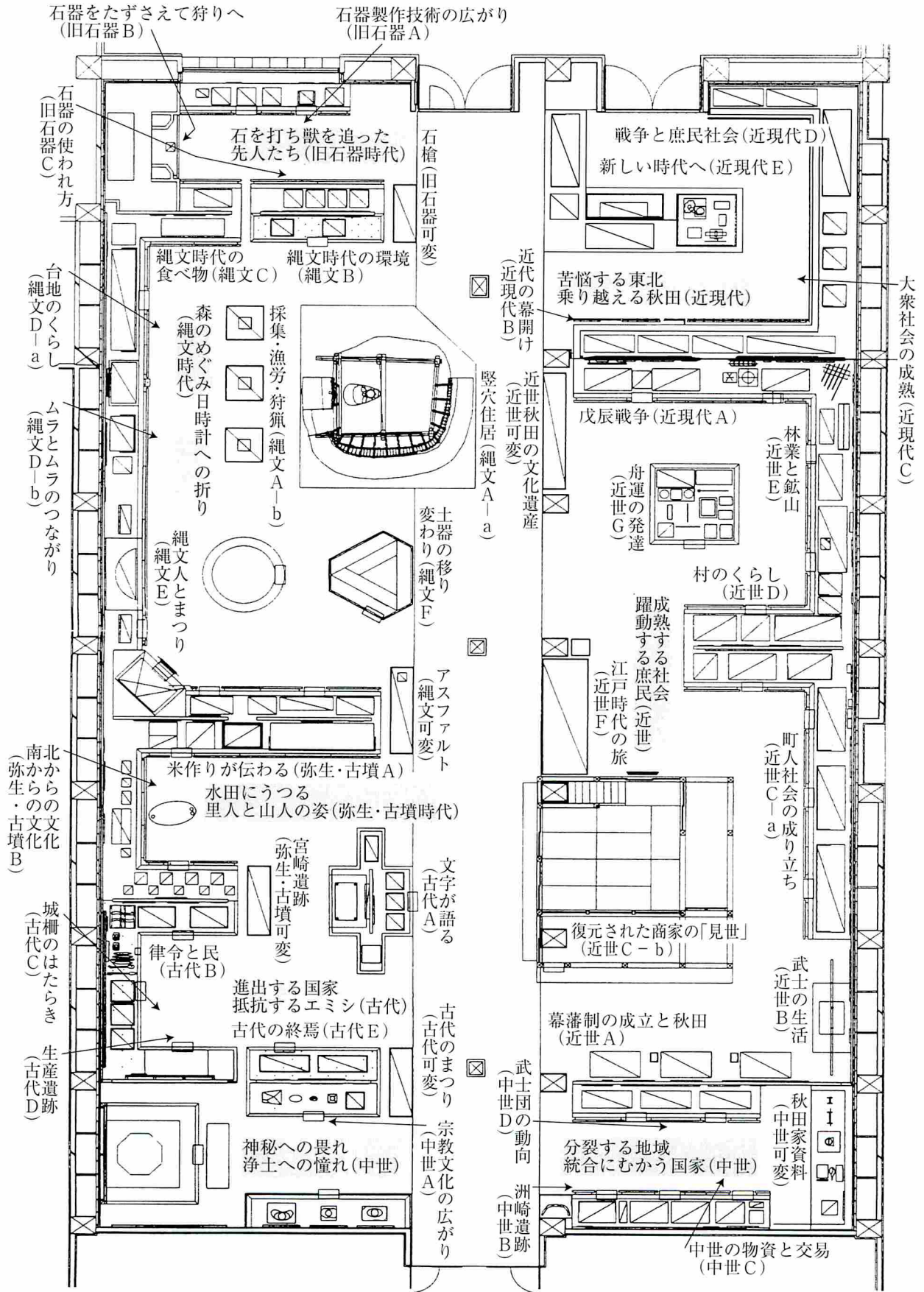


図3 人文展示室構成



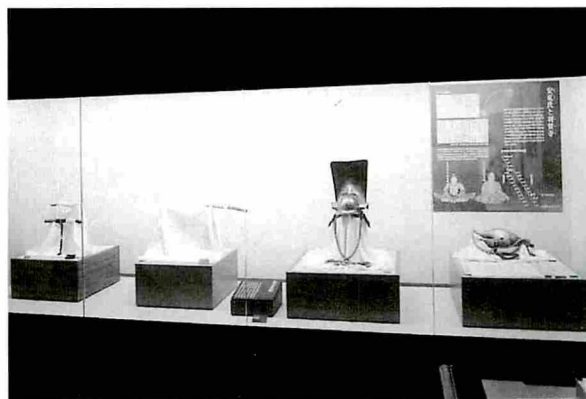
旧石器～縄文時代



旧石器（石器の使われ方）



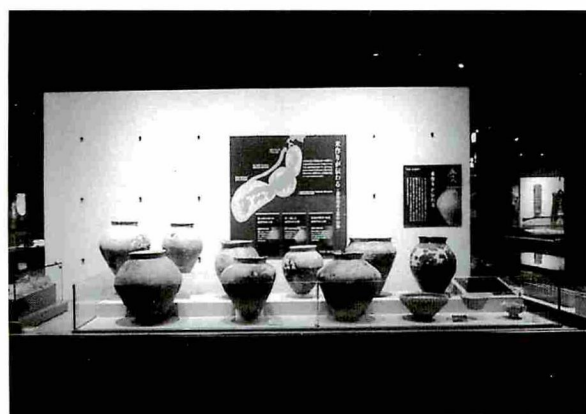
古代～中世



中世（秋田家資料）



近世（武家のくらし）



弥生・古墳



近現代（人力車）

図4 展示室情景